

地方における霊山の配置とその影響

田上 善夫

Distribution of Holly Mountain and its Effect in Local Area

Yoshio TAGAMI

Abstract

In this paper, the present realities were clarified of the mountains where mountain worships were done. In addition, the distribution of mountain worship over the whole country and the characteristics of the mountain worships of the local areas were clarified. The results are as follows: 1. From old days, mountains have been the object of belief for people, and the excellent mountain of each country is called "Mitake". Esoteric Buddhism and Shugendo had a big influence on mountain worship. Moreover, the religious climbing came to be done widely at the recent ages. 2. In Kyushu, the organization of "Sozan" in which a lot of buddhist temples were related was established as the Hikosan and Rokugo-manzan. 3. Kumano was first made as "Sanzan" organization that tied the mountain to gods and Buddha, and "Sanzan" spread to local mountains like Dewa-sanzan. 4. The Hakusan belief spread on a nationwide scale by mixing with various beliefs. However, it divided into three Banba without being united as Hakusan, and no religious climbing from the wide area was done. 5. At Mt. Fuji and Kiso-ontakesan, religious climbing became popular at the late recent ages, and the new organization of the mountain worship was established. 6. There are various syncretism around mountains. Though they were classified as either shinto shrine or buddhist temple after the Meiji era, some have clearly regained the characteristics of syncretism recently.

キーワード：霊山，霊場，山岳信仰，習合

Key words：Holly Mountain, Sacred Place, Mountain Worship, Syncretism

I はじめに

山頂や山麓などの祭祀遺跡，また開山伝承や後世の信仰施設の存在が示すように，山岳は古くより崇拝の対象とされてきた。各地にそうした山岳が多数ある一方で，それらの形態や内容，また認知のされかたなどは多様である。およそ山岳を捉えるにしても，a) 考古学からは，火山や「神奈備」などとして，b) 神道史からは，神が山そのものから発生，また天から降り一時的あるいは永く止住し，さらに恰好の登場の地として，c) 民俗学からは，火山，水分，葬所として，d) 宗教学からは，コモリ，マツリ，ノボリ，オガミの対象として（池上広正，1975），などのように，学問領域によりさまざまである。

また生活によっても山の神はさまざまで，山仕事をする人々には山中異界の支配者であるが，農民には水源や肥料の供給を司る者であり，狩猟者には女性で古くはその祭儀に女性が奉仕した（千葉徳爾，1976）。多くの祭祀遺跡は，山頂よりも中腹の巨石奇岩や巨木のもとにあり，狩猟から農耕にかかわると山霊は里に降りて農耕神となり，山麓に広く分布す

る山の神として農業社会に受容された（桜井徳太郎，1976）。このように山は，里とのかかわりから，捉えられている。

日本の神は有限な絶対であり，一つの山に多くの神霊がある。人が死んだあと霊が山に行き，神霊を含むために山は神体であるが，里宮や山宮が作られて，神体と神霊が別と誤解されるようになった。山に対し何らかの思情が原始住民の間に抱かれていたが，山裾に葬られて山から天に昇り，山中他界観となった（和歌森太郎，1975，2007）。山には祖先崇拜が結びつく。

修験道は，山の神霊の宗教観念に仏教的教説が結びついて，組織化された。天台・真言は，従前の固有山岳信仰を前提とした。畿内の人々には葛城山は霊山で，吉野山は聖山であった。葛城山の役小角は伊豆に流され，吉野山は極楽浄土とみだてられて藤原道長も経筒を納めた。山に入り禪定し回峰修行をする修験者が育ち，平安末期にその中から山で念仏を行う聖があらわれ，中世以来，抖擻して加持祈祷を行い，檀那を獲得する山伏が広まった（和歌森太郎，1975，2007）。

山岳信仰や修験道は、国家統制になじまないため、地方に固有のものが育ったともいえる。霊山自体が霊地などを含む複合的なものであるが、広く知られた出羽・白山・吉野・熊野・彦山などをはじめ、全国各地の諸霊山の配置は多様である。これらの霊山は、各地の自然的基盤の上に位置する一方でそれらと同一ではない。以下ではまず全国の霊山の中から、各地を代表するものについて、現在の実態を把握する。次に全国における霊山の配置について分析する。さらにそれにもとづいて、霊山およびそれとかかわりの深い霊場の特色や成立また影響などについて、検討を試みる。

II 高山登拝と霊場

1. 東北の霊山

出羽三山

庄内平野東部の出羽三山では、羽黒山権現は聖観音：倉稻魂命で現世の果報，月山権現は阿弥陀如来：月読命で来世の成仏，湯殿山権現は大日如来：大山祇命で過去現在未来を超えた悟りとされる（風間弘盛，2006）。出羽三山は、修験道開祖の役小角より早い六世紀末から七世紀初期に、崇峻天皇皇子が開いたとされた。湯殿山は総奥の院とされ、その参詣は三山修行の最終目的とされた。慶長十八（1613）年の修験道御法度以降には、羽黒山は天台宗に統一されるが、湯殿山は真言色が強かった。湯殿はその祭祀の独占をはかるが、寛政十一（1799）年には、羽黒は湯殿の祭祀権はないが、真言の行法で行うとされた。これは、有力な羽黒の本山派を牽制する、幕府の宗教政策とみられる（藤田祐俊，2006）。

羽黒山（414m）西麓^{とうげ}の手向に、宿坊集落がある。山門の先にかかる須賀^{しが}の滝は、江戸時代に引かれた農業用水の余り水を利用したもので、用水を昼には7割、夜には3割を利用するという。南谷には施設跡が多く残る。南谷の名は、本宮の北東に鎮守を置き、その南に位置することに由来し、比叡山の南谷、上野東叡山の不忍池付近に類するという。

この出羽三山は東北地方屈指の霊山であるが、その特色の一つはそこで修行が行われることである。修行の外的手段として山岳があり、こもり、歩き、水で洗い清め、心身を鍛える。周囲から隔離し秀麗な孤峰で、里に近いものが選ばれ、修行者の心に崇

高の念を植え付け、その中で自己が見直され、心が緊張状態におかれる。出羽三山では春の峰は正月に、夏の峰は夏季に、信者たちが先達の案内で三山を駆け、秋の峰は修験者が一定期間山にこもり、冬の峰は松聖が百日間修行する。出羽では女人禁制であったが、修験と比較的縁の薄かった木曾の御嶽山、越後の八海山では女人の登拝が盛んである。般若心経を唱え、廃仏毀釈後には祝詞も増えた。夜中と早暁に勤行し、昼間は回峰をする（岸本英夫，1975）。

出羽三山では、白装束をつけて、さまざまな行が行われる。羽黒山抖擻では手向から出羽三山神社へ登拝し、月山（1979m）抖擻では金剛杖をもち、なだらかな道を頂上に登り参拝する。月山には多くの講の人たちも登拝する。夜間抖擻では、国宝の五重塔前で、床堅めという座禅をする。水垢離では、増水して濁った水に肩まで入る。滝行では、冷たく激しく落ちる水流を受ける。壇張りという、飯、味噌汁、漬物などの食事が供される。天狗相撲という、土俵はあるが投げ倒すだけで取り組まれる。南蛮いぶしという、忍苦の行が行われる。出生の火渡りといい、火の上を一人ずつ、跳び越える。それらは、三語という祓詞を唱えながら行われる。なお、こうした行は十界になぞらわれ、南蛮いぶしは一の地獄界、天狗相撲は四の修羅界、床堅めは九の菩薩界に当たるとされる。

2. 北陸の霊山

越後

北陸には蔵王や熊野など多くの山岳関係の社がみられるが、とくに多いのが白山神社である。越後観音霊場の多くは、この白山神社を伴う（図1）。

魚沼地方魚野川に沿った堀之内町の大悲山弘誓寺は、北に魚野川、国道17号や関越道を望む。越後観音第十三番、また越後新四国七十六番の、真言宗寺院である。長元五（1032）年に、醍醐寺の僧が観音を安置し、後に子安観音とよばれるようになる。これは白山権現のお告げといわれ、境内に白山神社がある。なお平成16（2004）年の中越地震では「ばくりました」とのことで、観音堂の再建直後で堂内はみな倒れ、灯籠なども倒れて狛犬は土の上に落ちたという。

信濃川と合流し、長岡市街南東部にある、総鎮護悠久山^{あおし}倉柴神社には、天照皇大神、白山大神、出雲事代主神、牧野忠辰命が祀られる。この山麓の地

は中越地震で大きな被害を受け、大鳥居が崩れ、石橋が落ちた。

また長岡市街の北部、信濃川の土手に隣接した蔵王堂城跡は、社寺の地であった。一の鳥居、仁王門跡に続き金峰神社があり、左手西側に堀に囲まれた蔵王安禅寺には、山王や秋葉なども祀られる。もともと股倉という王神を祀っていたが、仁治年間(1240-43)に蔵王権現が鎮座する。三十三体の蔵王観世音菩薩の石像が祀られ、社家や衆徒の屋敷があった。

見附市の南東部、東山の丘陵の麓に、秘密山正音院ちんたくじがある(図2)。大草鞋の掛けられた仁王門、本堂、観音堂があり、本堂の上方には白山神社が鎮座し、また伊夜日子大明神、すなわち弥彦山(634m)を祀る石碑も建つ。越後観音第十六番で、境内に四国、西国、秩父、当国の石碑も建つ。住職によれば、真言宗智山派寺院であるが、寺は真言宗以前からあり、和銅二(709)年行基作と伝わる千手観音像がある。建物は善光寺式である。長尾景虎が栃尾からすよし栖吉さらに春日山に移る途中にこの地が位置し、毘沙門天も祀ることなどにより、庇護を受けたが、上杉の米沢転封に際してこの地の8寺中、3寺が従い移転したという。

東山の丘陵の麓のやや北側に、小栗山不動院しょうりつざんがある。越後観音十七番で、真言宗智山派である。和銅年間(708-714)に行基が作った千手観音を祀る。観音堂の門前に、千手観世音菩薩の黄色い幡が並ぶ。不動明王を祀る。七所権現は観音を守って奥の七所山に祀られ、後に熊野権現が勧請されて鎮守となった。中越地震では壁が落ち、板を張るが、とくに庫裏は被害がひどいという。

三条市の弥彦線北三条駅付近は、市街地の中に多くの寺が集まっている。その中の多宝山宝塔院は、越後観音第三十二番の真言宗寺院である。大治元(1126)年に開創という。境内に地震の碑があり、本堂は文政十一(1828)年の地震後に建てられ、三条市内で一番古いという。先の中越地震でも、この三条の地まで大きく揺れたという。

三条で信濃川に五十嵐川が合流するが、その南東方20km上流の八木ヶ鼻に、200mほどの断崖があり、三条市街からも遠望される(図3)。川から長い参道が緩やかに上り、越後観音三十三番の、明白山最明寺がある。八木ヶ鼻一帯は古代から神域で、付近の八木神社はかつて山頂にあった。大同

二(807)年に八木大明神と守門大明神が祭られた。八木の字は米に通じて倉稲魂命、守門岳(1537m)は往来の安全を守り豊磐間戸命・櫛磐間戸命という。

白山周辺

白山信仰ととくにかかわりの深い地の一つが、加賀南部である。白山は山頂や峠など高地からは遠望されるが、平野部から間近に遥望できるのは小松平野と江沼平野で、およそ松任から南の大聖寺までの間である。ただし海岸線から白山を遥望する直近の町は小松付近であるが、距離的に直近の町は越前の勝山である。

白山の西に位置する山代温泉は、街の中心部に湯の曲輪がわという総湯があり、隣接して比高15mほど上方に、霊方山薬王院温泉寺がある。北陸不動三十三番の真言宗智山派寺院で、本尊の薬師瑠璃光如来、平安初期の十一面観音、鎌倉期の不動を祀り、境内には金毘羅大権現も祀られる。神亀二(725)年に行基が温泉を発見し、白山権現を勧請して山代温泉守護とし、長徳三(997)年の花山法皇巡幸の際に明覚上人が中興したという。この周辺にある白山五院の随一といわれた。なお那谷寺など白山三ヶ寺も、江沼郡付近にあった。隣の服部神社は、和銅年間勧請の式内社で、山背郷社ともいわれる。明治8(1875)年に服部上宮から薬師山に移り、白山神社と合社した。本殿まで108段の石段があり、初めて麻布を織ったという天羽槌雄命あめのはづちのおのみこと、また菊理姫命みかづきや山代日子命を祀る。背後の比高約50mの三ヶ月台の萬松園には、八十八所の石仏が寺から頂上を経て回遊するように並ぶ。凝灰岩製せきがんで石籠に入り、数m置きに並べられる(図4)。平成16年に修復された。

山代から大聖寺川の5km上流にある山中あたりでは、深い溪谷内にも多くの高木が茂って水面が隠れる。山中温泉は、その溪谷上の段丘に広がる。山中の国分山医王寺は、市街にある総湯の菊の湯から30mほど上がったさらに一段高い段丘上にある。隣接して白山神社があり、明治に寺地の半分を売却したという。天平年間(729-748)に行基が開き、建久年間(1190-1198)に温泉が再発見され、寺も再興された。山中護持明院といわれた温泉守護寺で、真言宗高野派準別格本山である。現在は、北陸不動第二十七番でもある。また稲荷明神、河濯明神、愛宕明神の祭りも行われ、菅原神社がある。最近の参詣者は、半分が地元の石川県からで、また3分の

1が関西・中京圏からである。

山中の上流、古九谷への途中の栢野^{かやの}には、養老元（717）年に泰澄が妙理観世音菩薩を祀り、後に平泉寺、豊原寺に従って天台宗となり、白山五院の一つ栢野寺・栢野社があった。明治20年に菅原道真を合祀し、菅原神社となり、樹齢2,300年を超える大杉が残る。

3. 東海の霊山

木曾御嶽山

濃飛境に位置するが、東海地方などから多くの人が登拝するのが木曾御嶽である。この御嶽山は、古生代・中生代の1500mに達する基盤上に、第三紀以降に、摩利支天、三ノ池・二ノ池と三笠・小三笠の寄生火山、四ノ池の順に溶岩が噴出した（柴山悦次・野口喜一、1969）。木曾谷の、とくに王滝流域はヒノキが特産で、王滝営林署の年間20万m³の伐採中、ヒノキは13.6 m³を占める。慶長十一（1606）年の江戸城修築以降、各地の城下町整備で、17世紀前半の40年間に大量のヒノキが送られた。王滝川の御岳湖は、愛知用水公団により昭和36（1961）年に竣工し、知多半島さらに篠島まで水が送られる（野口喜一、1969）。御嶽山は噴火記録はなかったが、1979年10月28日に山頂付近の地獄谷から噴火し、噴出物が木曾側に長く流下した。2006年12月～2007年2月にも、火山活動が増加した（図5）。

木曾福島から王滝川沿いは河岸段丘が続く。現在も多くの石置屋根の建物が残り、トタン屋根の家が並ぶ。王滝川沿いの農地は休耕地となり、畑も荒れており、また付近は猿が多い。王滝に里宮があり、大鳥居から拝殿まで67+371段の石段が続く。本殿は流水に沿い、崖壁の下に鎮座する。記帳した参拝者は、関東・中部からが9割を超え、とくに埼玉と静岡で7割を超えるが、愛知は少ない。王滝の宿坊内には御嶽神社が祀られ、参拝者には御神酒、御札、手拭が下賜される（図6）。

木曾御嶽への登拝には、金剛杖を持ち、笠と、峰二つ・丸に横線の朱印がつく鉢巻をつける。王滝は標高935mほどであるが、1250m付近は基盤と火山体の境で、水量豊かな滝が多く落下する。この滝では御山を前にして、勤行、真言、滝行が行われる。さらに車道に沿って、霊神碑や各教会の霊場が続く（図7）。五合目付近には御嶽の火山体が広がり、目の利益がいわれる大鳥居の八海山神社には、三笠山大

神も祀られる。その後各所で禊の祓、心経、真言が繰り返される。

七合目付近の田ノ原（2190m）から登山道となるが、付近はオオシラビソが大きく偏形し、ハイマツも点在する。大江権現（2300m）付近には、ナナカマド、ハイマツ、ミヤマハンノキ、オオシラビソ、シラタマノキ、ササ、ダケカンバなどの原が続く。列を整え、間をあけず、懸念仏すなわち、「引き寄せ給え、引き上げ給え、散華散華、御山は繁栄、御山は隆昌、御山は晴天、御山は凱晴、六根清浄、大願成就」などを唱えながら登る。オオシラビソの森林限界付近に、三十八所の一つ金剛童子があり、寛政四（1792）年の普寛行者以前から祀られている。また金剛蔵王は、御嶽蔵王とは別とされる。八合目の岩室小屋（2470m）からはハイマツ帯で、富士見石付近は風が強く、ハイマツとシャクナゲが風衝形となる。九合目の岩室付近からは風が強まり、硫黄のにおいが漂うようになる。

王滝頂上（2936m）から八丁弛みを経て、田ノ原から5時間ほどで剣ヶ峰（3067m）に達する。御嶽山の神は国常立尊、大己貴命、少彦名命とされるが、真言では御嶽山蔵王大権現、白河権現とされる。神社より御札が下賜され、祓詞、修祓の後に、拝礼、玉串が奉奠される。木曾御嶽本教の話によれば、御嶽山は創唱宗教ではなく、覚明と普寛の両行者以降のものであるが、書き残されず、また御利益も説明されることはない。万余の講の連合体であって、それぞれで解釈があるという。

地上とは別世界の山頂において、^{おざ}御座が立てられる。先達を前にして座り、多くの神々の名をあげ、祓詞、心経、御嶽興隆、真言が唱えられる。九字が繰り返し切られ、諸神が唱上され、再び九字が切られて、登拝が報告される。一同低頭の中、御座の開始から20分余りして、^{なかざ}中座に御嶽の神の降臨が告げられる。真言、礼が述べられ、御嶽の神の言葉をきく後、10分余りして真言、九字が切られ、御嶽の神が去る。お礼の勤行、蔵王権現真言、心経があげられて終わるまで、約40分が経過する。

二ノ池（2908m）は、日本最高所の湖という。その脇の二ノ池新館で、その夜は宿泊する。翌朝、二ノ池から、多くのケルンが建つ賽ノ河原、避難小屋を経て、摩利支天山に向かう。その後、飛騨頂上の五の池小屋を経て、火口壁を下って三ノ池（2717m）に降る。径200mほどの広い湖面であるが、

白竜王を祀るこの池は、鳴り物を禁忌する特別な聖地とされ、とくにその水が信仰の対象とされる(図8)。

御嶽山から黒沢方面の上部斜面は、急峻で木製梯子がかかり、木の根も多く、下方まで長く延びる雪溪のトラバースを含め容易でない。懸念仏をかけることなく、互いに危険に注意しながら降りる。八合目の女人堂(2470m)から下は、樹林の中できつい下りとなり、七合目の行場小屋(2130m)を経て、六合目の中の湯(1750m)まで下る。

四合目の大祓滝(1300m)で、水行がされる。抖擻や水行で、大自然との一体化がはかられ、御座も神との一体化である。二合目の黒沢の里宮、御嶽神社(800m)は、白川が蛇行して突き出た尾根の石段上にある。正式参拝の後、お神酒、御札が下賜される。さらに木曾福島駅前の御嶽教山の本部を参拝し、巫女舞の奉納の後、御神酒、御札をいただく。

御嶽山には、講の白衣で登る人が多く、子供達もまた白衣をつける。信仰登拝では山という自然にも霊を観想し、金剛杖は実用以上に、精神的な意味合いが強く、床の間の隅などに立てかけるものとされる。同行二人とされ、遍路宿では洗って大切に立てられる。行者は奥駆けができなくなると巡礼などに行き、御嶽登拝も75歳くらいから断念する人が増えるという。

4. 中国の霊山

鳥取の霊山

中国地方では、日本海側に多くの霊山が位置する(図9)。中でも著名なものの一つが倉吉東方の三徳山である。鳥取の修験寺院は当山派が多いが、三徳山三仏寺は、天台宗修験道三徳山法流である。三徳川から200m余り上の崖に建立された投入堂は、内部に蔵王権現が祀られている。背後の三徳山(899m)は石鎚山や吉野山と並び称せられ、蓮の花が落ちた地に蔵王権現が祀られたという。

倉吉平野東郷湖の東岸に、基盤岩が露出した御冠山(186m)がそびえる。そこに伯耆一宮の倭文神社が鎮座する。社名は倭文にちなみ、祖神の建築植命を祀る。また出雲からきた大国主命たごりひめのみことと田心姫命したてるひめのみことの娘の下照姫命を祀り、出雲山ともいわれ、安産のご利益がある。鳥居の奥には仁王門があり、かつて境内には神宮寺がいくつかあった。また境内に康和五(1103)年銘の経塚があり、経は1.2×0.9mの石棺

に納められていたという。

鳥取県西部にそびえる大山(1729m)は、中国地方で最もよく知られる霊山である。元谷、行者谷が山頂より刻まれ、また北壁が続いている。金門の前には角尖安山岩の真っ白な賽の河原が続き、石が積まれる(図10)。北麓の750mから900mにかけて、多くの社寺や宿坊が残る。

角磐山大山寺は出雲国神仏霊場第十番、中国観音霊場第二十九番、さらに伯耆観音霊場の札所でもある。明治以前には、現在の本堂付近は大日如来を祀る中門院であった。100mほど高方にある大神山神社奥宮は、大己貴神を祀るが、社殿は文化二(1805)年の権現造りのものである。境内にはまた、元徳二(1330)年の下山神社が移される。釈迦如来を祀る南光院はかつて地藏菩薩：大智明権現を祀る本社であった。出雲国神仏霊場第九番である。なお大神山神社は、10km余り離れた北西麓が本社とされる。また阿弥陀堂には、阿弥陀如来と、両脇侍の勢至菩薩、観音菩薩が祀られるが、この付近は西明院である。

出雲の霊山

大山の西方、松江平野・出雲平野周辺に、多くの霊山がある。

中海の岸から2kmほど南に清水山(172m)がそびえ、その西側中腹に清水寺がある。天台宗寺院で、十一面観音が祀られ、厄除、病気平癒に利益があるとされ、節分には星祭も行われる。石段の上、開山堂の周囲が広場となる。闕伽井堂の奥にある高い石垣の上にある根本堂には大悲閣の扁額がかかり、さらに奥に安政年間建立の高さ33.33mの三重塔が建つ。出雲観音霊場第二十一番、出雲国神仏霊場第十一番、中国観音霊場第二十八番の札所であるが、境内には西国・出雲・中国の百観音御砂踏霊場が置かれる。さらに、三重塔の奥の山道に、三十三観音の小さな石仏が続いている(図11)。

中海に注ぐ意宇川の10kmほど上流に、八雲山(424m)がそびえるが、その北東麓に熊野大社が鎮座し、南西麓の斐伊川流域に須我神社が鎮座する。熊野は、能城、佐太、杵築(出雲)とともに、出雲四大神とされる。南の熊野山(天狗山、610m)の山頂にあったが、中世に500m上流の御笠山麓に移って上の宮となり、明治に下の宮に合祀された。日本火出初社として発火がいはれるが、位置からは出雲東部にあたる。なお、出雲国神仏霊場第十五番

とされる。

松江平野に茶臼山（171m）があり、その西方に八重垣神社が鎮座する。付近で稲田姫命が八重垣を作り、八岐大蛇の難を避けたという。川をはさんで奥にある鏡の池には、神占の小銭が浮かべられる。境内の山神神社には、男根が祀られる。出雲国神仏霊場第十四番である。

玉造温泉の温泉街上手にある温泉山清巖寺は、臨濟宗寺院である。かつて山中の岩窟に観音が奉安され、松峰山岩屋寺といわれたが、明治5（1872）年にこの清巖寺に移された。隣接する玉作湯神社は式内社で、境内には古墳が残る。碧玉や水晶からの玉作りは、弥生末より行われた。また出雲に14あるという要害山の一つ、中世の玉造要害山城の麓にある（島根県勤労者山岳連盟、2000）。

出雲平野南東部にそびえる仏経山（366m）は、出雲国風土記では神名火山とされた。その北東麓の神庭西谷の南奥に、荒神谷遺跡がある。なだらかな谷の南向き斜面、谷底から高さ5mほどのところから、弥生中期後半から後期初めの銅剣や銅鉾、銅鐸が大量に出土した。出雲平野を北に控え、西方の斐伊川左岸には西谷墳墓群、東方の加茂岩倉遺跡には古代青銅器文化があった。

島根半島東部

島根半島付近の地形は、東西でやや対照的であるが、西部は藪の長浜を綱、三瓶山を杭とし、東部は弓ヶ浜を綱、大山を杭として引き寄せたといわれる。主として新第三紀層からなり、宍道湖と中海は沈降したが、島根半島は断層で東西に分かれて、東部は沈降海岸、西部は隆起海岸となる（島根県勤労者山岳連盟、2000）。

島根郡はまた、大国主命が「高志の都都の三埼（珠洲市）」から引いてきたとされる。島根半島東端沖合に「沖之御前」、「地之御前」があり、夏期には沖之御前の海上に、日の出を遥拝する。航海安全の多くの地蔵が岩壁に安置され、地蔵埼といわれる。

馬着山（220m）の南麓に、美保神社が鎮座し、事代主命、恵比須を祀り、また境内に糺社がある。美保関港に続く谷の奥に位置し、南の美保湾越しに大山を眺望するが、社殿は東を向き、山の端に対して。出雲国神仏霊場第八番とされる。門前の幅二間ほどの青石畳通りは、元禄の北前船の盛行時に埋立て作られた歓楽街であった。北側の谷にある浄土宗の仏谷寺は、後鳥羽上皇と後醍醐天皇の行在所

であり、また美保は小野篁が「わたの原八十島かけて～」の歌を詠んだ地で、12月3日に諸手船神事があり、港とのかかわりが深い。

中海の北に、松江北山の一つ枕木山がそびえる。山上の龍翔山華蔵寺は、延暦二十二（808）年に智元上人が開基し、枕木薬師如来を本尊とする臨濟宗南禅寺派寺院である（図12）。平坦地に広大な境内があり、中海をはるかに見下ろす。出雲国神仏霊場第七番である。

島根半島中部

島根半島は佐陀川で東西に分かれるが、さらに平田一十六島までが中部となる。斐伊川が1635-1639年に東流すると水害が増え、天明七（1787）年に宍道湖から北へ佐陀川が開削された。現在は静かな浅い水面に沿って、マリナーが作られる。佐太神社は佐太大神社といわれ、秋鹿郡の神名火山とされる朝日山（344m）の東、佐陀川左岸の三笠山麓に鎮座する。付近には弥生時代後期の多数の遺構があり、国引神話、出雲国風土記にも登場する。三殿の中央に佐太大神を祀り、また伊弉冉尊をはじめ多数の神々を祀る。出雲二宮とされ、杵築社（出雲大社）、熊野社あるいは日御碕社とともに三大社の一つとされる。江戸時代には出雲の3分の2を出雲大社が支配し、3分の1を佐太神社が支配したという。本殿左手高方30mほどに、母儀人基社という径1mほどの磐境があり、伊弉冉尊の陵墓を移し祀ったというが、それよりも古い祭祀施設といわれる。

佐太神社の西方、なだらかな谷の奥に延林山成相寺がある。仁王門の奥に、古い五輪塔、紅梅白梅の古木がある。行基の開基といわれ、高野山真言宗である。佐太神社奥の院別当で、佐太神社の地にあった普音寺も、神仏分離で移された。出雲観音二十八番、出雲十三仏三番、古江六地藏第三番である。

朝日寺は、神奈備山である朝日山を母体とする。成相寺からの山道が続き（図13）、山頂にあって、大山を望み、古浦を見おろす。行基が開創し、弘法大師が巡錫したという真言宗寺院である。出雲霊場の第二十九番である。境内周辺に、数mおきに並ぶ背丈ほどの石塔は、上下二層からなり、上が本尊、下がお大師さんといわれる。本堂脇より始まり、橋の下を潜り北斜面に出、周遊して尾根道を通り、境内に戻る。また境内には、出雲札三十三度供養などの石碑が並ぶ。

その西方では北の日本海側は急斜面で、南の宍

道湖側に緩斜面が続く。稜線上の標高220mほどの地に、医王山一畑寺、一畑薬師がある。寛平六(894)年に天台宗医王寺として創建され、正中二(1325)年に臨濟宗成徳寺として再興され、応正二(1653)年に一畑寺と改称される。出雲観音の特別霊場、出雲国神仏霊場第三番、中国観音第二十六番でもある。

宍道湖北岸にある金亀山清浄院満願寺は、高野山真言宗で、天長九(832)年に弘法大師の開創と伝わる。その名は宍道湖の竜神が、金亀に変じたことにちなむ。ほかに水神の宇賀弁財天を祀り、隣接して出島神社がある。出雲三十一番、出雲十三仏四番、古江六地藏第六番である。

島根半島西部

十六島湾の南西に、鼻高山(はなたかせん)(536m)などの山々が見つらなる。この付近では、日本海側が緩斜面である。谷の奥に、天台宗の鱒淵寺(がくえん)がある。推古二(594)年の開創といわれ、千手観音、薬師如来をまつ。境内の斜面に多くの堂が配置される。浮浪の滝は行場であり、また11月23日の大梵焼会では護摩が焚かれる。摩陀羅神社に、慈覚大師が招来したという守護神を祀る。出雲観音第三番、出雲国神仏霊場第二番、中国観音第二十五番である。谷の奥にさらに道が続き、丁石と石仏が置かれる。分水界の遥堪峠まで、さらに80分、伊努谷峠まで40分の位置で、交通路であった。

半島稜線の南にある出雲大社は、大国主大神を祀る。出雲国風土記では出雲御崎山の西麓と記されるが、御碕山は今は弥山(494m)とよばれる。大国主神は国譲りにより幽界の主宰者となり、天御舎(あめのみあらか)に隠れ、また幽世(かくりよ)に帰りいく靈魂(みたま)を導くとされる。出雲大社の神殿は南面するが、神殿内部では御神座は西面するという。東部の熊野大社に対し、出雲大社は西部にある。

出雲大社の西方1km、八雲山(175m)と坪瀬山(360m)麓の長谷寺は、真言宗寺院である。境内に南方の樹木が茂り、南無大慈大悲観世音菩薩、南無大地蔵菩薩、と書かれた多くの札が貼られる。出雲観音霊場第一番である。

島根半島北西端に、日御碕神社が鎮座する。丘からは三瓶山を望む。素戔鳴尊が住む地を柏の葉で占うと、落ちたのが背後の隠丘という径200mほどの岩山で、出雲国風土記の美佐伎社とされる。現神殿は本土側の岩陰にあり、「神の宮」に素戔鳴尊を祀り、その日本総本宮(ももええにすのやしら)という。出雲国風土記の百枝槐社と

される。8月7日の御幸神事では、海岸からわずかに離れた経島と御旅所で、夕日の祭りがされる。東の美保関に対し、日御碕は西となる。出雲国神仏霊場第二十番である。

なお出雲三十三観音霊場では、現在は3月9日が札所開きで、3班に分かれて集まるといふ。また札所は、山に11寺、中間に11寺、低地に11寺がある。出雲霊場は西国と同じくらい古くて、昔は天台の寺が多く、また平地ばかりでは修行にならないからといい、今では朝日寺が一番の山の寺といふ。

出雲国神仏霊場は、平成17(2005)年4月23日に開かれ、第一番出雲大社の境内で式が行われた。出雲大社では寛文の造営(1667)以来、唯一神道に立ちかえていたが、境内で読経が行われた(藤岡大拙, 2006)。このように、出雲国神仏霊場は、神仏習合を背景としている。神社でも出雲大社を除けば、祭りは年に3日で、他にとくにすることがないからともいふ。また出雲大社には出雲大社教、日御碕神社には、出雲日御碕大神宮教の建物がある。

5.九州の霊山

英彦山

直方平野の南にそびえる英彦山は、日本海・瀬戸内海・有明海への分水界の位置にある。長く伸びた尾根の高度500m付近から上に町が続き、吉野山に似る(図14)。715mに奉幣殿、970mに市杵島姫ら宗像三女神を祀る中宮(中津宮)、さらに関銭(下乗)を経て、1,100mに護摩壇を備えた産霊神社(行者堂)があり、中岳山頂(1188m)に英彦山神宮の上宮がある。

中岳から尾根続きの南岳(1199m)は、急傾斜で、岩の鎖場が続き、材木石という柱状節理が露出する。800mに推定樹齢1200年、胸高周囲12.4mの鬼杉が立つ。中腹につけられた道は、沢ごとに昇降を繰り返す。700m付近の玉屋神社:英彦山般若窟(図15)は、法蓮上人の修行の地といわれ、般若窟内には霊水が湧く。隣接した英彦山鬼神社には猿田彦大神を祀る。他にも諸所に窟を備えた抖擻、回峰の道であり、また石垣跡も残る。

なお英彦山から四方に峰が続くが、南西方の宝珠山も修験の地である。峠付近の小石原は、現在焼物の大産地となっている。

六郷満山

瀬戸内海に突き出た国東半島は、径30kmほどの

ほぼ円形をなし、中央部の両子山（720m）から周囲に裾が伸びる。国東の六郷満山は、天台系山岳寺院で、宇佐に近い側から、本山、中山、末山に分かれる。国東六郷満山霊場は、三十三札所を本山、中山、末山の順に巡り、最後に宇佐神宮に参る。半島の南西部山麓に建つ真木大堂：伝乗寺は、仁聞菩薩の開基といわれ、六郷満山の本山本寺である。

半島南西部には、奇岩の尾根が続く中、高度260m付近に、現在の峰入りの出発点である胎蔵寺がある。本山末寺の胎蔵寺から、大きな石を並べた石段が続く、390m付近では平安末期に高さ7、8mの不動明王と大日如来が彫られ、熊野磨崖仏といわれる。また国東塔とよばれる様式の、鎌倉の宝塔が多く建つ。

両子山の2km北方にある文殊山（617m）の中腹300m付近に、六郷満山末山本寺の峨眉山文殊仙寺がある（図16）。前面と背後に、岩山が連なる。大化四（648）年に役の行者が五台山を感得し、文殊師利菩薩を祀って開山、あるいは仁聞によるともいわれ、天台宗寺院である。宇佐八幡宮と連繋し、くろくいざんとも通じる。国東六郷満山霊場第二十五番、九州三十六不動霊場第四番で、奥の院には十日ほどで70人が記帳し、地元大分はじめ九州からが8割を占める。境内には六所権現、石造の仁王像、600年前の鐘楼、天保四（1833）年に上州群馬の人により建てられた5mほどの宝篋印塔が建つ。

国東半島は山勝ちだが、奥まで水田が広がる。東側の田深川に沿い、高度150m付近に龍下山成仏寺がある。養老二（718）年の仁聞菩薩の開基といわれ、元禄の石仏が建つ。六郷満山末山本寺で、国東六郷満山霊場第二十九番、九州三十六不動霊場第三番でもある。

両子山（720m）の山腹の足曳山両子寺は、仁聞により養老二（718）年に開かれた、天台宗別格本山である。両子大権現を祀る奥の院は、390m付近にあり、崖を背にした懸造りで、院内の岩からは水が湧く。六郷満山中山（修行道場）本寺で、国東六郷満山霊場第十三番であるが、峰入の最後とされ、参詣者も多い。また九州西国第六番、九州三十六不動一番でもある（図17）。

九六位山

臼杵市と大分市の間をそびえる九六位山（452m）頂上部に、円通寺がある（図18）。崇峻天皇四（591）年、百濟の日羅上人が九頭の鹿と猪に導かれ開山し

たことが、九六位の名の由来である。前方の鐘楼山に、経塚遺跡がある。建久年中（1190-98）に大友氏より寺領を受け、兵火の後に寛永十九（1642）年再興、寛文八（1668）年に改名、臼杵藩から援助を得て、檀家はない。境内の浄雪、浄念らのいた三光院は、今は廃屋となり、九六位・四国修行大師像が残る。九州西国第十番であるが、九州西国霊場は、宇佐の仁聞菩薩と法蓮上人が和銅六（713）年に開創という。

久住山

大分道に沿って、山腹に草原が多く分布する。由布岳（1584m）南西麓の湯布院から西方に、九州を東西に分ける分水嶺が走り、九州本島の最高峰の久住山（1791m）に続く。久住山南麓ではリンゴが栽培される。

久住山の猪鹿狼寺は、高度600m付近にある（図19）。伝教大師が延暦二十四（805）年に十一面観音を安置し、大和山慈尊院とした。江戸時代には、東叡山の末寺であった。下宮の獄宮（建宮神社）と同所に位置したが、新たに通じた道で隔てられている。一帯は阿蘇の外輪山に至るまで、なだらかな草原地帯である。牧場とされ、付近に特有の景観であるが、放棄され雑草が増えているという。文治二（1187）年に、頼朝の命で殺生禁断の地での巻狩を許したが、供養のため猪鹿狼寺と改名する。天正の乱で16院が焼失し、寛永年間（1630-35）に本堂を現在地に移した。

III 霊山の全国分布

1. 地方霊山と関連する社寺

全国の主要な霊山として、『修験道辞典』（宮家準 編、1986）所載の351山を主な対象とした。また霊山のような崇拜対象としての山岳に深くかわる社寺について、同書所載の529の修験社寺を主な対象とした。

まずこれら霊山について、その高度から概観する。霊山は類似の高度のものが多く、高度100mごとに分けると、ほぼ半数が300-900mの間である。とくに600-700mのものが、最多となる（図20）。この最多高度以上では、霊山の数は通減するが、1800-2100mの高度の霊山も、またやや多くなる。

こうした比較的に低山、あるいは高山の霊山が



図2 越後霊場と境内の山岳社祠

越後観音霊場の第十六番椿沢寺の境内に、白山神社がある。社前には伊夜日子大明神、弥彦山の神が祀られる。



図3 八木ヶ鼻の大岩壁と霊場

越後観音霊場の第三十三番最明寺は、五十嵐川上流八木ヶ鼻の比高約200mの大岩壁の下にある。

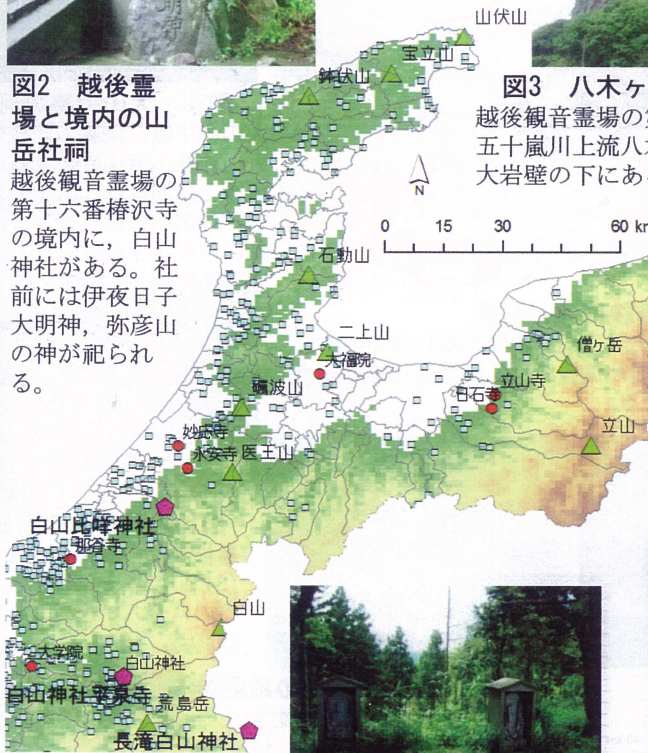


図1 北陸の主要霊山と白山神社の分布

霊山(▲)や修験社寺(●)は、魚沼などに多くみられる。白山三馬場(■)はじめ白山神社(□)は広く分布し、寺院の境内にも祀られている。越後三十三観音霊場の札所寺院(●)と巡拝路(—)は、谷や山麓付近を主に巡っている



図4 白山直近の白山社寺と境内霊場

白山にほど近い山代温泉に、北陸不動霊場の第三十三番温泉寺がある。白山権現の勧請に由来している。境内より三ヶ月台(83m)にかけて、八十八ヶ所が設けられている。上流側の山中の札所は、白山神社が隣接する。



図5 木曽御嶽山の山容

御嶽山(3063m)は木曽谷からは見えず、開田高原にぬける地藏峠から姿を現す。孤立峰であるが峰が南北に長くのびる。25kmほど北方の乗鞍岳(3026m)によく似ており、規模は乗鞍岳よりやや小さい。下部の基盤の上に、後からの火山体に乗っている。傾斜が大きく変わる1200m付近には、多くの滝が形成されて、修験の行場となっている。2400m付近に森林限界があり、それより上部は高山帯となる。山頂付近は冠雪している。御嶽山の北東には開田高原が広がり、南には王滝川の河谷が東西に走る。北西側を除いて、山体の大部分が木曽川水系に含まれ、水は濃尾平野に至る。

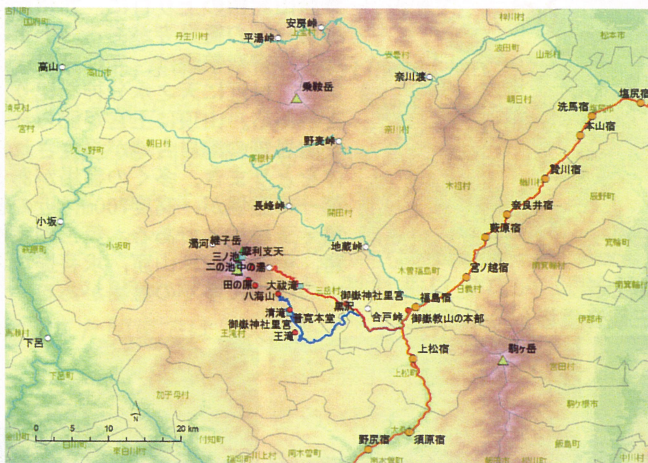


図6 御嶽山の二つの登拝ルート

御嶽山には西からは中山道を下って、王滝川の黒沢に至り、中の湯(1750m)を経て登る(●ルート)。東からは中山道を上って、木曾福島より王滝川に沿って王滝に至り、田の原(2190m)を経て登る(○ルート)。西からは覚明、東からは普寛が深くかかわっている。北の長峰峠を越えて、木曾と飛騨が結ばれる(—)。



図7 御嶽山の普寛本堂

近世に御嶽登拝を促めた普寛を祀る。高度1300m付近より、多数の霊神碑が建つ。付近では崩壊が多く、多数が埋まるといわれる。

図8 御嶽山の三ノ池

高度2717mにある。神水を前に多くの講が行をする。この池の神の前では、音が禁忌とされる。池より神水を掬いその場で飲むが、神告により持ち帰らない。



図9 出雲平野周辺の主要霊山・修験社寺と霊場

霊山(▲)の周辺には修験社寺が多くみられ、それらは出雲三十三観音霊場(一)や、出雲国神仏霊場(一)の札所となる。新たに開創された出雲国神仏霊場は、出雲大社をはじめ12神社と8寺院を含み、神仏を習合した構成となっている。



図10 大山の賽の河原

大山の中腹、稜線の岩肌の下に大山神社・大山寺がある。賽の河原と金門には、大小の岩が並び、仏教的色彩を帯びるが、背景には岩が存在している。



図13 朝日山の朝日寺

島根半島中部、朝日山(342m)の頂上部にあり、境内の八十八ヶ所は山札とよばれる。

図11 清水寺三十三観音→

172mの低山の樹林を巡る境内霊場である。観音は氏名と年齢の書かれた、多数の白や赤の札に隠れている。葬祭業者が用意した札を、葬儀の翌日、七日、四十九日などに貼るといふ。



図12 枕木山の華蔵寺

島根半島東部の枕木山(453m)上にある。仁王門より上方の斜面に、慶応年間に建てられた巨大で異形の石像がある。



図15 英彦山の般若窟

英彦山北西の上り口に、九州西国霊場第一番の霊泉寺がある。上手の英彦山神宮奉幣殿は、元は霊泉寺大講堂で、付近に天之水水分神を祀り、下宮がある。山頂に上宮が祀られる。安山岩質の溶岩台地が浸食された山体をとりまき、多くの霊場がある。第一の霊場が、高度700m付近の般若窟・玉屋神社である。第二の蔵持山窟、第三の宝珠山窟、求菩提など、山の内外に多くの霊場がある。

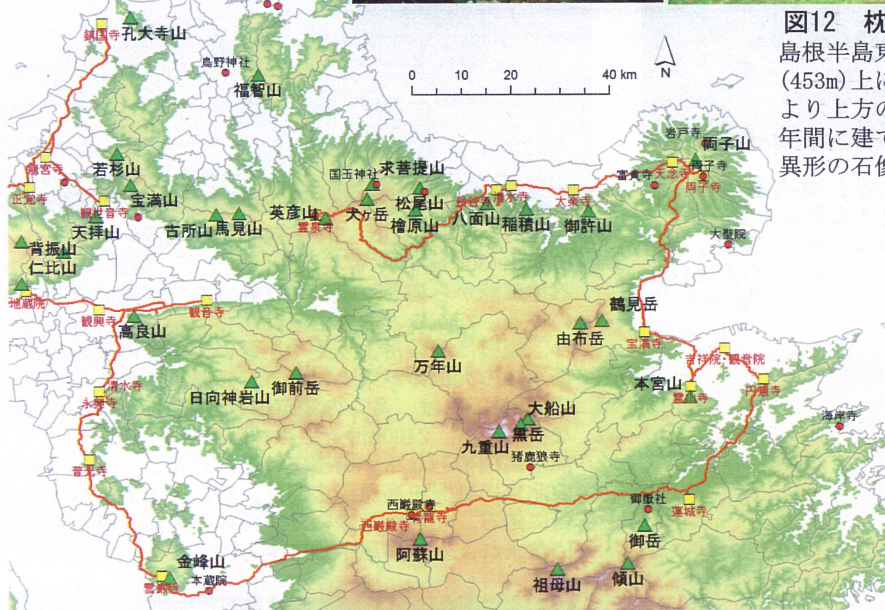


図14 北部九州の霊山と修験社寺

英彦山や阿蘇山などの霊山(▲)の麓を、九州西国三十三観音霊場(一)が巡る。



図16 文殊山の文殊仙寺
国東半島中央部の低山(617m)で、寺の背後には凝灰角礫岩の岩塔がそびえる。修行の地であり、観音が祀られる。



図17 両子山と両子寺
九州西国霊場で標高720mにある。石段両側のような鎌倉以降の仁王像は、国東半島に130体以上あるという。



図18 九六位山と円通寺
白杵の西、末広川と大野川間に、なだらかな山々が続く。452mの山上の円通寺は、九州西国霊場である。



図19 久住山麓猪鹿狼寺
中腹1050m付近の本堂跡地に中宮、山上1700mに神武天皇兄の建男霜凝彦命と十一面観音を祀る上宮がある。

多数みられる傾向は、地方によりやや異なるが、近畿地方を除いて大体共通している。

2. 霊山の分布の地域性

霊山の分布地域は全国的にみると、およそ中部以東、近畿・中国・四国、および九州のように、東・中・西日本の3地域に大きく分かれる(図21)。これらの地域では霊山の高度にやや差違がみられる。東日本では高く2000mを超える霊山も少なくなく、中日本では低くて1000m以下のものが多く、西日本では低山のほか高山も多い(図22)。

先述のように、霊山は低山あるいは高山に分化の傾向があり、これら地域の高度分布の特色は、地域の霊山の性格を示すことが考えられる。霊山を高度1000m以上のものと、1000m以下のものについて分けると、これら低山と高山とでは、分布地域には差異がみられる。およそ低山は、八溝・房総・東海・奈良・岡山・四国東部・北九州・南九州などに多い(図23)。高山は、出羽・日光・戸隠・富士・白山・大峰山・美作・阿讃・九州山地などに分布が集中する(図24)。

これら低山は平野周辺部にあたる一方、高山は内陸山地に位置する。このように、両者は同一地域に混在するよりも、分離する傾向がみられる。

3. 霊山の配置とその影響

次に霊山に関連する社寺について、その分布を概観する。修験では著名な霊山に大きな拠点があるが、関連社寺の分布密度は霊山の分布とはやや異なる。とくに奈良周辺では高く、また上越、南関東、東北部、瀬戸内、北九州にも中心がある(図25)。

これらの社寺は、全国的には神社系、天台系、真言系のものがほぼ同数である。ただし、中国・四国地方をはじめ近畿地方では、神社系は少ない(図26)。また関東では、天台系とくに本山修験宗が多い。近畿・中国・四国・中部地方では、真言系、とくに真言宗醍醐派が多くなる(図27)。

地方における山岳は、もとより生活の場としてのほか他界とみなされるなど、崇拜また参詣の対象とされ、また各地のさまざまな山岳祭祀の影響を受ける。そのため、関連社寺の分布はとくに複雑となると考えられる。もともと霊山・霊峰などよばれるところは、秀麗な山容、奇怪な岩壁、豊富な流水などをそなえ、各地方における象徴とみなされる存

在であることが多いが、地方に固有の特色をそなえるものである。こうした霊山の差異も、社寺の分布を複雑にさせると考えられる。

また霊山には高度により差異がみられたが、高山は修行や登拝講の対象などとなり、低山は巡礼をする霊場につながる傾向がみられる。

4. 固有山岳名の神社の分布

現在では必ずしも修験とかかわらない神社においても、固有の山岳の名称を冠するなど、山岳信仰とのつながりを示すものがある。これらは特有の分布をしている。

たとえば羽黒神社は、東北地方周辺に多い。ただし庄内平野には少なく、新潟に多い。とくに山形・置賜から中通りを経て、関東平野に多くの分布がみられる(図28)。

この出羽三山信仰について、文化財調査報告書や自治体史から、関連石造物の存在・年代などが岩手、宮城、秋田、茨城、埼玉、千葉、東京、神奈川について調査されている。そこでは近世後半以降での出羽三山信仰の普及過程と、その変容が指摘されている。まず岩手では、安永二(1773)年より湯殿山が中心であったが、明治16(1883)年ころから月山が湯殿山と同数となった。宮城では、明治28(1895)年から、月山が増えて湯殿山を逆転した。茨城では、明治33(1900)年から月山が増えた。これには修験道廃止後に、出羽三山は神山とされ、三山神社社務所のある手向集落が祭祀権を独占したことが背景にある。また、出羽三山に併刻されるのは、東北にある石造物では、東北の山や金毘羅などであるのに対し、関東のものでは、坂東、秩父、四国などの札所と関東以西の山である(西海賢二・早川典江, 2005, 2006, 2007)。

5. 特定山岳の施設の分布

木曾御嶽を信仰する御嶽教について、その教会の一覧が、北海道、関東、北陸、関西、四国、東海の大教区に分けて、載せられている(生駒勘七, 1966)。これより、御嶽教教会の分布を示した(図29)。

この御嶽山信仰も、出羽三山信仰同様に、近世後半以降に急速な普及をした。修験は著名山岳に拠点を置いており、独立、個別的な面があるが、民間への普及を通して、隔絶せずに地域的にも連続する

特色がみられる。

なお木曾御嶽の施設の記録から集計すると、富山など北陸からは近距離にもかかわらず、登拝する人はいない（時枝 務,2007）。これには一般の登山者は入らないが、御嶽信仰では木曾御嶽であり、飛騨側山麓の高山では乗鞍がシンボリック的存在となる。御嶽山信仰にはさまざまな教団が連合するが、御座という特有の儀礼を有することから、その受容には地域的な影響も考えられる。

IV 霊山と霊場の検討

1. 山岳信仰と修験

「御岳」と記す山は多いが、ミタケは金峰山、オノタケは御嶽山、ウタキは御嶽である。また生活空間の中の、最も高く大きい山が嶽とされた。ダケ信仰は水の神、祖霊の神の信仰で、新たな神格として金剛蔵王大権現が創生された（宮家 準, 1985）。御岳は霊山中でも主要な位置を占め、そのため霊山について検討する基本となる。

また行基の開基また行基作の仏像を伝える寺院は全国に777を数える。行基（668-749）は、修行者の福田行の^{ふくだんきょう}実践として、多くの事業を私的に行ったが、当時の国家仏教では禁じられていた（吉田靖雄, 2001）。先述の寺社にも行基の伝承が多くみられたが、山岳信仰は国家仏教以前の時代を継承することを示すとみられる。

平安初期には深山での虚空蔵法修行が取り入れられ、山林苦行の地位が高められて、密教から修験の成立がうながされた。とくに大和吉野郡金峯山に御嶽詣し、山林抖擻が刺激されて、さらに地方諸名山で抖擻し、山臥修行することが理想とされた（和歌森太郎, 1985）。修験道では役小角（634-706）を開祖の一人として、地方の霊山にも影響をおよぼすようになる。

このころ霊山は、中国にもみられる。山西省東北部にある五台山は、中国仏教四大聖地の一つで文殊菩薩の住地とされる。日本からは宝亀四（773）年入唐の霊仙三蔵が住み、承和七（840）年には円仁が訪れた（森下恵介, 2003）。山麓（1700m）の台懐鎮の街は、北台（3104m）、西台（2773m）などに囲まれる。こうした規模の大きな山岳の巡歴は、日本の山岳信仰に大きな影響を与えたと考えられる。

平安中期から浄土に至ろうとする気持から、金峯山浄土は御嶽詣でとなった。御嶽詣での装束は白色簡素なものであったが、山臥装束をまねたものであった。後には同じ南山の熊野詣となって、修験者を先達として利用することが多くなり、抖擻の面を顕著にさせて、ついに山臥の独立を導いた（和歌森太郎, 1985）。

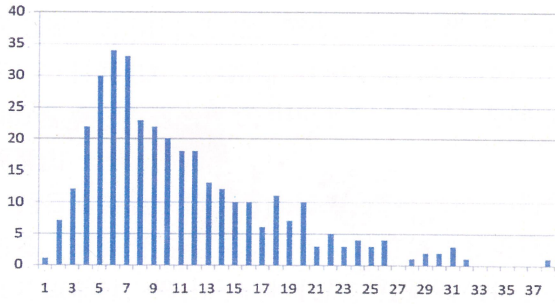
平安中期に、金峰と熊野を結ぶ大峰が開かれる。平安末には園城寺の僧が霊山に入り、熊野三山検校を引き継いで本山派を形成する。中世には、蟻の熊野詣での道者参詣習俗を生み、一週間の精進で出発したので隆盛をきわめた。平安末には、富士山や戸隠も知られる。白山信仰は平安末から中世にかけて、加賀から日本海沿いに北上し、一部が越後から信濃、関東に入り、一方美濃から尾張、三河、遠江と東海道沿いに進出した。聖護院が室町末以降認められた先達職は、伊勢・熊野・富士・白山・愛宕・三嶋あるいは日光であった（鈴木昭英, 1988）。山岳信仰は、修験と深くかかわりながら、全国に展開する。

また蔵王権現の分布は、とくに武蔵・甲斐・紀伊・出雲に多く、山居経行の適地で、古来山神を祀っていたところである。蔵王権現は金剛蔵王と異なる我国独特のもので、金峰山信仰と蔵王信仰、さらに役行者信仰も結びついた（佐藤虎雄, 1985）。修験のみならず民間信仰をまじえて、山岳信仰は複雑に変容した。

2. 九州の山岳と満山

各地方では、固有の展開がみられる。九州では天保年間に、豊前・豊後・筑前を中心に118の霊山を数える。それらには式内社のほか、修験の霊山も重視されていた。豊前・豊後では6世紀の北魏・新羅・天竺などの渡来僧に、筑前・筑後・肥前では7世紀から8世紀初めの行基に、また肥後・豊後は日羅に、阿蘇は最栄読師に、結びつくものが多い。高千穂では、修験者主導の山岳信仰が形成され、夜神楽も山を祭る儀礼として森で行われていた。霧島では、10世紀中頃にベトナム北部から渡来した性空が仏教を習合させ、性空はさらに背振山に入った（長野 覚, 2002）。このように九州では、大陸と半島の影響を直接受ける位置にあった。

古代の経塚は、畿内と九州北部の山岳に最も多い。また役行者の伝承密度は、出羽や北九州に多い。本山派は薩摩や筑前、当山派は肥前、豊後、肥後、



← 図20 高度別の
霊山数 (×100m)
高度100mごとに、霊山
の数を集計すると、
600m台が最多である。

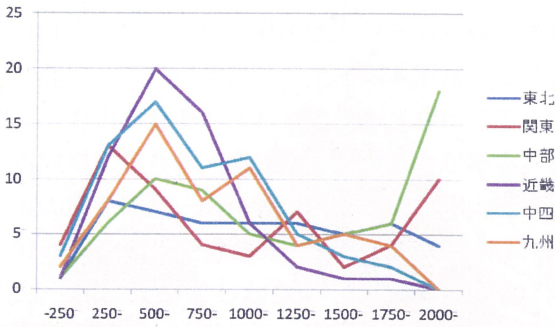


図22 地方別・高度別霊山数
中部地方と近畿地方では、大きく異なる。

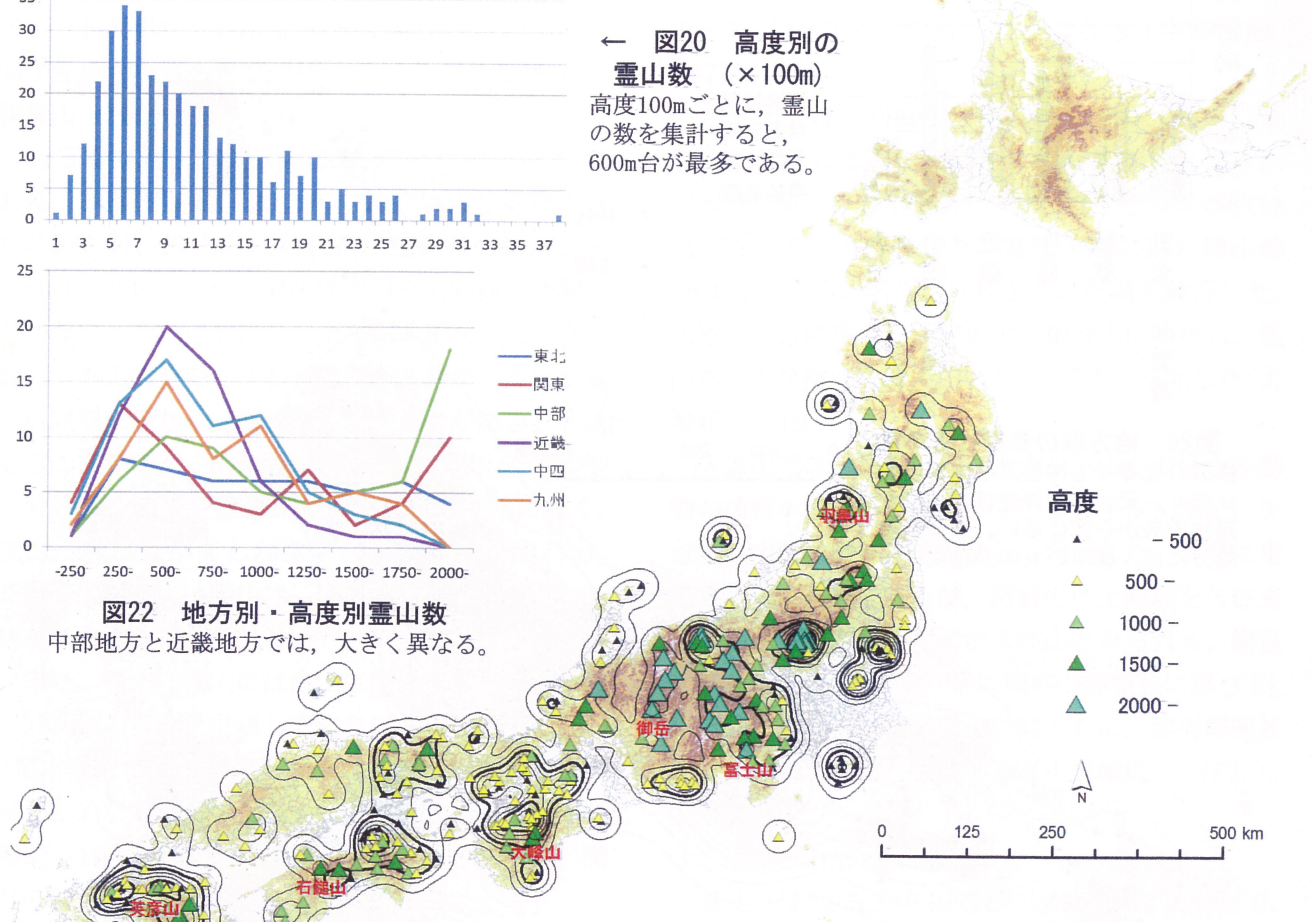


図21 主要な霊山とその密度分布

各霊山について位置と高度をカシミール3D上から得て、ArcGISで分布と密度を示す。また修験の社寺についても、同様な分析を加える。霊山の密度は、いくつかの地域に集中する。また各地方で霊山の高度が異なる。地方により、霊山の集中する高度が異なっている。

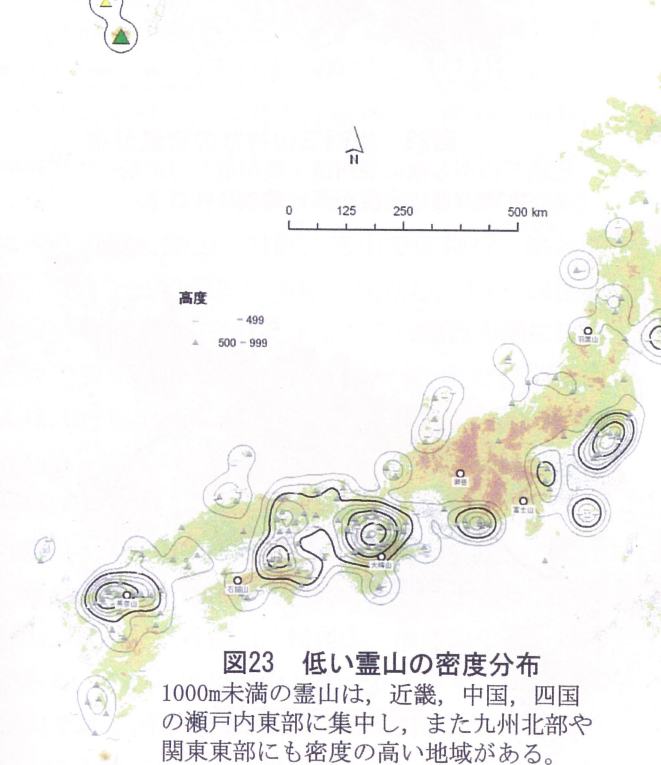


図23 低い霊山の密度分布

1000m未満の霊山は、近畿、中国、四国の瀬戸内東部に集中し、また九州北部や関東東部にも密度の高い地域がある。

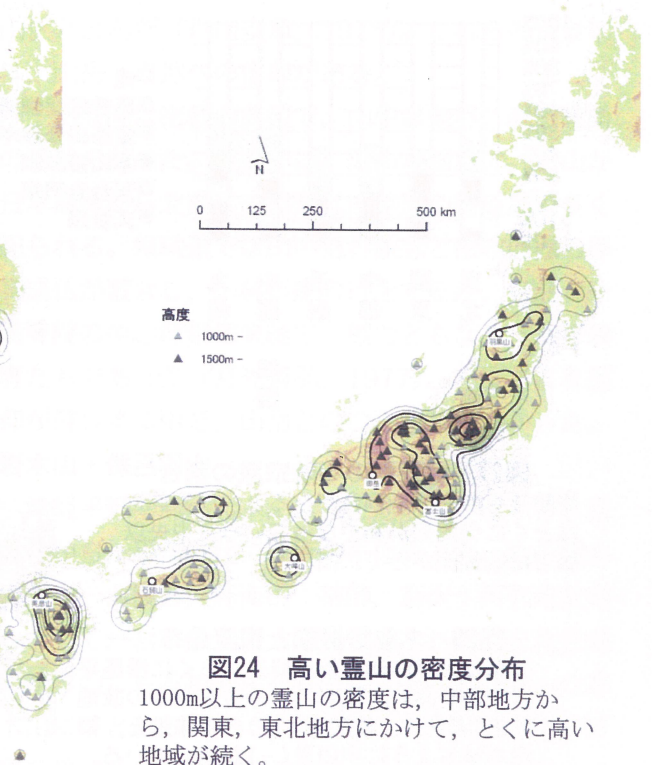


図24 高い霊山の密度分布

1000m以上の霊山の密度は、中部地方から、関東、東北地方にかけて、とくに高い地域が続く。

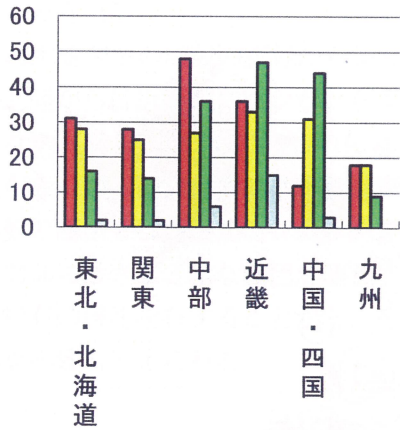


図26 地方別の修験社寺の数
修験の社寺でも神社系は中部以北に多く、天台系は周縁部に、真言系は中央から西に多い。また近畿地方には、種々のものが集まる。

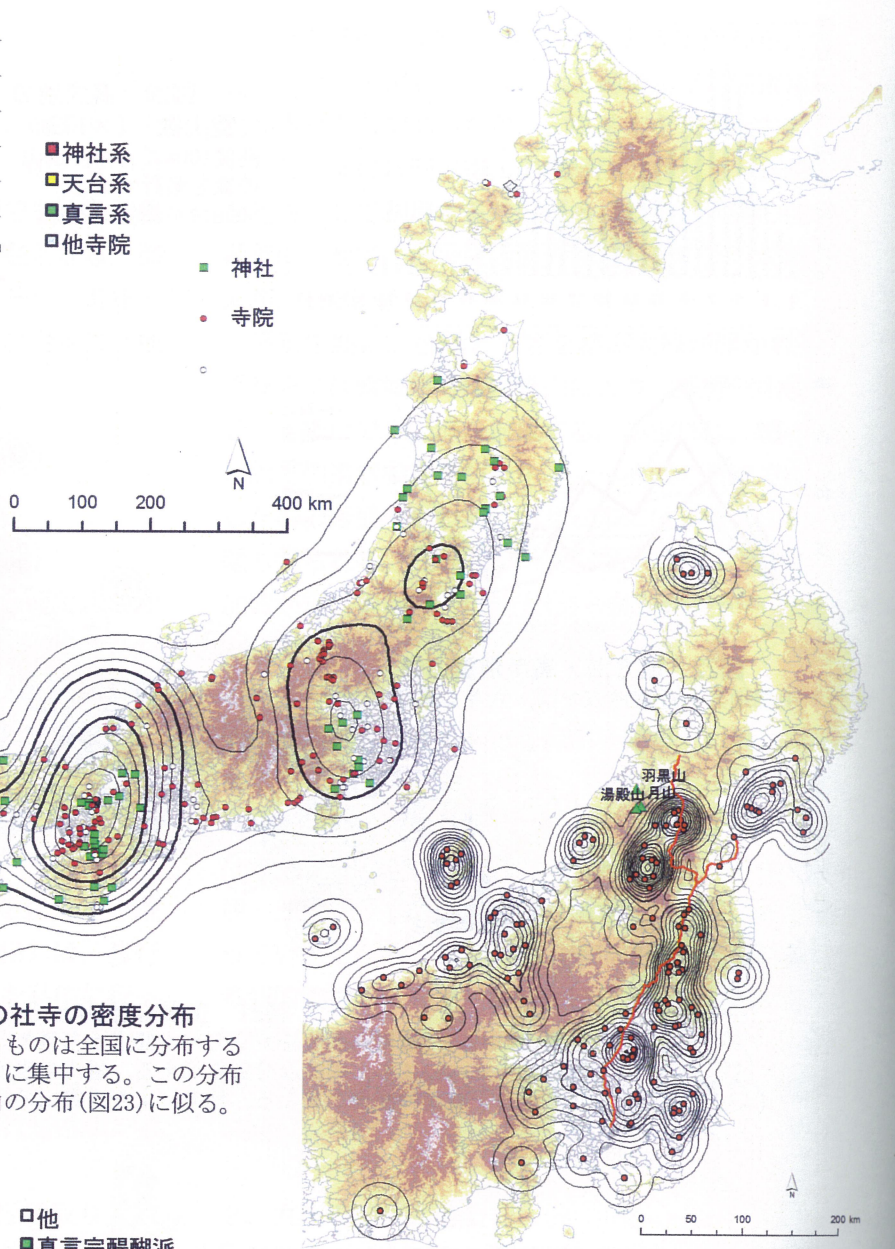


図25 修験の社寺の密度分布
現在は社寺に属するものは全国に分布するが、近畿地方にとくに集中する。この分布の特色は、低い霊山の分布(図23)に似る。

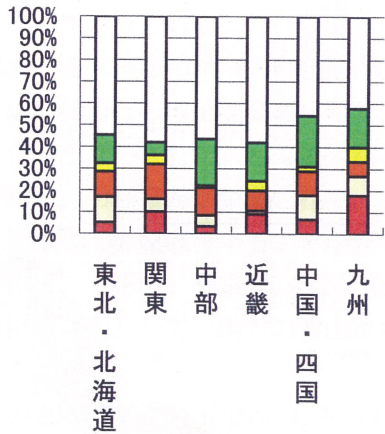


図27 地方別の寺院宗派の割合
修験社寺の宗派を割合で見ると、周縁部ではとくに寺門派が高くなっている。中央以西では醍醐派がとくに高い。

図28 出羽三山神社の密度分布
出羽三山から南に羽州道・奥州道(一)に沿って江戸や、また北陸方面に密度が高い地域が伸びる。

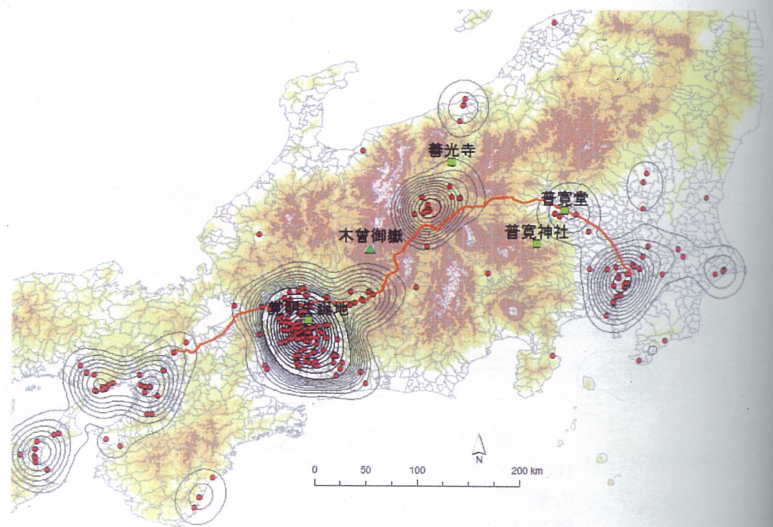


図29 木曾御嶽講と密度分布 →
分布は太平洋側の都市周辺、とくに濃尾平野で最も高い。覚明行者や普寛行者の故地周辺(春日井、秩父・本庄)の密集地と、御嶽を結ぶように中山道(一)が通っている。

彦山派の国山伏は肥前、筑後、豊前、豊後、肥後に多い（長野 覚，2002）。九州では、独自の山岳信仰が伝承される一方で、中央ともつながりを保った。

英彦山

西日本で随一の英彦山にも、いくつかの特色がある。享保十四（1729）年に勅許により英彦山となる以前は、彦山といわれた。江戸時代に200～300の坊があったが、現在は出羽三山同様に修験者がいない。彦山自体には、上・中・下宮の三宮寺組織に、周辺の霊場が加わって四十九窟がある。新羅でも同様に複合し、慶州南山五十五寺がある。およそ霊山宮寺は、一山一寺、三山一寺、惣山一寺の型に分けることができるが、三山一寺は九州になく、惣山一寺は九州にしかない（中野幡能，1977a）。この惣山あるいは満山は、国外の影響を受けた九州特有のものと考えられる。

また、九州の霊山には白山に関係するものがあるが、天童の信仰も付随しており、壇君信仰における太白山、小白山に近い。法蓮は密教や道教に関係の深い聖的な在家僧で、役小角と同時代である（中野幡能，1977a）。これらも九州の霊山における、開基の独自性を示している。

中世には熊野の影響を受け、北嶽・南嶽・中嶽は熊野三所権現の垂迹とされる。東は犬ヶ岳・求菩提山・松尾山に、西は岳滅鬼山・釈迦岳・馬見連峰・宝満山に続き、山岳抖擻に格好の条件を具備している。元禄九（1696）年には、聖護院から離れて別本山となる（佐々木哲哉，1977）。

彦山は胎蔵界、宝満山は順峰の金剛界、福智山は逆峰の金剛界とされた。いずれも四十八宿をそなえたが、前者では17ヶ所が大峰と同名である。峰入り道は大峰山では^{なほき}踞、彦山では^{しこのお}修行・^{なびき}路とした。大峰では11世紀に奥駆が成立し、13・14世紀に宿や行場が整備された。彦山では鎌倉中期には窟と周辺聖域で参籠行や廻峰行が行われたが、彦山入峰は13世紀後半から末が想定される（山本義孝，2006）。修験で重要な修行の峰入りは、中央の影響を受けて成立した。

六郷山・久住山・篠栗

英彦山周辺には、彦山六峰といわれ、福智山、普智山、蔵山、求菩提山、松尾山、檜原山の著名霊山がある。これらは英彦山と同一ではなく、鎮守は英彦山では三所権現であるが、求菩提山や六郷山では、六所権現を祀る。求菩提山は、明応三（1494）

年に聖護院宮が至って彦山から離れ、松尾山も中世末には13の末山を持つようになる（中野幡能，1977b）。

六郷山では、回峰行が平安に始まり、鎌倉以来室町に衰退した後、寛延二（1749）年から嘉永六（1853）年に、7回の峰入が行われ、その後昭和34（1959）年に再復興した。寛延年間には六郷山の28本寺を中心に廻り、166ヶ所の行場を練行した。知恩寺付近に集まり、宇佐宮、御許山に参拝し、後山岩屋の金剛寺を峰入口とし、両子寺で結願した（大嶽順公，1977）。

久重山では、岳宮信仰に由来し、山上の池水や動物の精霊への信仰が加わっている。平安初期に、天台系の山僧により神仏習合して発展した。阿蘇に准じて名づけられているが、阿蘇の山上修験を久住方といい、久住方の住むのが久住山とみられる。建宮から、寛文六（1666）年に飛森の御新宮に移って、久住神社となった。建宮・新宮ともに、建男霜凝社として、祖母岳神と融合する（中野幡能，1977c）。

3. 東北の山岳と三山

東北では7世紀から8世紀の仏像はみな正観音で、9世紀には徳一が磐梯神社の別当寺を建立し、神と仏の一体性・同一性を説いた。東北の式内109社では、山神32、水神21、石神14を祀り、地方神・武神・中央神は42である。明治以後も、宮司を法印とか山伏とよんだ（戸川安章，1975）。これらの背景には、山岳・自然への信仰がある。

一山寺院は密教の典型で、山中は他界、殺生禁断の霊地であった。東北では、葉山が福島に、白山が日本海岸から北部に、熊野は内陸部の街道筋に多く祀られる。修験道では山中他界観念と密教同様の即身成仏が習合し、山林抖擻の行をするが、東北の一山寺院の中心は妻帯衆徒で、戦力ともなりうる修験者たちであった（月光善弘，1977）。さまざまな信仰が習合する中で、山岳とのつながりは深かった。

岩木山・保呂羽山

津軽平野南部の岩木山は、土地の神一産土神と祖霊神から、平安時代には天台系信仰となった。巖木山：十一面観音、鳥海山：薬師、百沢：阿弥陀を中心として、岩木山三所大権現が祀られた。また各地の祖霊のこもる神聖なモリ山は、中心的モリ山の岩木山にまとめられた（小館衷三，1977）。天台の影響を受ける中で、農耕の守りとして、8月前半には

盛大なお山参詣が行われる。

秋田の保呂羽山は、古くより山岳信仰の対象であったが、平鹿・由利を結ぶ地にあり、式内社とされる。平安仏教の影響後、鎌倉以降に修験として蔵王権現を奉斎する。東方にある御嶽山の式内、塩湯彦神社にも、小角・弘法・慈覚の伝承とともに山伏屋敷があり、熊野権現と化して修験の中心となった。また隣接した白滝観音は、享保期（1716-35）に成立した、佐竹藩内三十三番札所の一番となった（塩谷順耳、1977）。

出羽三山

山形では、霊魂は供養を重ねるとモリの山から、鳥海山や月山に行き、そこで先祖様という大きな霊格に包含されて安住するとされる。福島にはハヤマが多く、祖霊は春には田の神となって田に下り、秋には再び山に帰る（岩崎敏夫、1977）。山岳と他界観念、祖先崇拜との結びつきは深い。

月山神社は式内の名神大であり、平安から南北朝には月山が信仰の中心であった。庄内には天和三（1683）年に大峰派190、羽黒派175、鳥海派69の山伏がいて、全国には文政五（1822）年に羽黒派山伏が3872人いた。手向では、とくに会津は奥州、東北は霞場、関東は檀那場、それ以外は遠国とよんだが、関東が最多で、信越も多く、ほぼ全国におよんだ。修験の中心は羽黒山荒沢寺であったが、江戸時代の民衆信仰の中心は湯殿山であった（長井政太郎、1975）。地元の祖霊の戻る山の一方、広域からの参詣者には、異なる性格のものであったことが考えられる。

4. 白山と伝播

白山には大御前^{おおごぜん}（2702m）、大汝^{おおなんじ}（2684m）、別山（2399m）がある。天長九（832）年に越前、加賀、美濃に馬場が開かれ、それぞれ平泉寺、白山本宮、長滝寺がある。越前禪定^{ぜんじょう}（禪頂）道は、平泉寺三宮—一劍宮—三頭山—児卒塔婆^{ちごそとば}—法恩寺山—早内森—雉神峠—河上社—秘密谷—一ノ瀬—六万山—指尾山—尾平—弥陀ヶ原—室堂—白山と続く（松村英之、2003）。

加賀では中世の白山本宮は、仏教系施設で天台系仏事が営まれ、加賀一揆では本願寺側に加勢した。また近世の下白山は、神社と位置付けられていた。明暦元（1655）年から寛保三（1743）年にかけて、加賀側の尾添と越前側の牛首・風嵐が争い、大汝峰

は加賀の真言方、御前峰と別山は越前の天台方に帰した（由谷裕哉、2006）。三馬場は置かれた位置は遠く隔たり、山岳へのつながりも異なる。

また加越境の笈ヶ岳（1841.4m）では、明治38（1905）年に、13、14世紀の銅鏡・仏像・剣などが発見され、永正十五（1518）年銘の経筒が、埋納されていた（時枝 務、2003）。神仏習合の山岳信仰は、白山周辺にもおよぶ。

越後

越後に向かって白山信仰は、沿岸と佐渡への海流ルート、姫川、名立川、鯖石川、阿賀野川の河川ルート、能生白山神社—関山権現—戸隠神社、また魚沼、中蒲原、東蒲原の尾根ルートで浸透した。白山権現や白山系観音は、妙高山の関山権現、米山、弥彦山南の国上寺、小千谷、見附、下田などにみられる。また越後の天台系は、事実上修験で、中魚によく残る（高岡 功、1988）。

白山信仰は地元神と異質でなく、神仏ないまぜの高度な信仰であった。白山信仰は巨大勢力ではあったが、出羽三山のような大霊場を形成することはなかった。立山は全国で配札・絵解き・経衣配置をし、布橋灌頂会に集めて立山禪定を行ったが、白山は一体化した三馬場でなく平泉寺白山神社の衆徒の力で広められても後続の送り込みがなく、本山とは関連が失われて抖擻の活力が失われた（高岡 功、1988）。すなわち受容されやすく、広まる一方で、その主体的な特色は失われている。

妙高山

関山三社大権現は、和銅二（709）年の開基といわれ、国常立尊（聖観音）、白山大権現・伊弉諾尊（十一面観音）、新羅大明神・素戔鳴尊（文殊菩薩）を祀る。平安末から鎌倉初の阿弥陀石仏群は、熊野系修験によるとみられ、また経塚があった。さらに白山系阿弥陀信仰に、善光寺系阿弥陀信仰が混入する。九頭龍権現について、龍の頭が戸隠、胴が関山、尾が能生との伝承が生まれる。後には観音信仰が禅宗に転宗した宝海寺に、阿弥陀信仰が真宗に転宗した興善寺に、火祭りが別当の妙高山雲上寺宝蔵院に残った（大場厚順、1988）。周辺や中央の信仰を多く受容したことは、この地が各地から僻遠のためと考えられ、変容は信仰圏の影響を示すと思われる。

石動山

石動山天平寺は虚空蔵菩薩を中心とする五社権現を祀ったが、一山は伊須流岐比古神社として存続し

た。講堂では衆徒が大般若、権現堂では別当職が神前読経、両社家が小鼓神楽を奏する。仏式では、権現の祭礼とは異なる先祖供養が、仏名会でされた。三月晦日から五月三日まで堂に籠って山内の峯入りをし、気多社に西の峯入りをした（北原裕全，2006）。石動山は、白山に近い中で、越後方面に多くの進出を果たした。

5. 山岳の講社

近世後半には、山岳へ修行者だけでなく、一般にも広く登拝されるようになった。そこでは、修験とは異なる、山岳へのかかわりがある。山岳により、さまざまな講が生まれた。

たとえば浅間神社は富士道者により勧請され、さらに富士講が発生し、富士塚が作られた。代参講により持ち込まれた三峰の神が氏神化し、地域社会の山の神信仰に習合して、三峰信仰が表出した。三峰代参講では、講が巨大化すると直接本山の三峰神社と結びつくが、御嶽講も類似する（宮田 登，1976）。

富士山

富士は数十年ごとに噴火を繰り返したので、畏怖の念が抱かれ、山中に祀堂を建てて浅間大神を祀る。大同元（806）年には富士宮に神社が建てられ、9世紀半ばには山頂に登り、久安五（1149）年には、末代上人が山頂に大日寺を建立する。浅間大神：浅間大菩薩：大日如来とされ、木花開耶姫とならび男女を超越するとされた。末代上人は富士宮市元村山で、修験者の僧房を建て、興法寺や大棟梁権現など後世の富士修験の基本形態を完成した（遠藤秀男，1988）。

文保年中（1317-19）には、村山で富士行が組織されて、山伏のみならず一般人が参加するようになった。村山修験は、東海道を西に信仰圏を伸ばしていった。今川義元は村山修験を庇護したが、徳川家康は浅間神社を重視し、村山修験は危険な存在とされた。富士峰修行は七月二十二日に出て翌日山頂に立ち、三島大社などを参拝して、八月十六日に村に戻る。鎌倉・室町の富士山中の奉納物は、尾張からが多く、後に武蔵・美濃・上野などが加わる（遠藤秀男，1988）。

江戸時代には角行が創始して富士講が広まるが、幕府により講集団の拡大が危険視され、弾圧されることがあった。男女平等を基本精神とする不二道が

創出され、明治以後には扶桑教、実行教、丸山教などが再編成された（西海賢二，2001）。

武州御嶽山

大麻止乃豆乃天神社という式内社があったが廃れ、文暦元（1234）年から建長八（1257）年にかけて、大中臣国兼が修験草庵を再興し、金剛蔵王権現を勧請した。鎌倉初から中期には定着するようになり、江戸中期まで醍醐三宝院末の金峰山世尊寺領額院が社僧となっていた（斎藤典男，1985）。関東に多くの御岳講がある。

秋葉山

徳川氏が秋葉神社と可睡斎を深く崇敬し、天正十八（1590）年の関東入封に伴い、秋葉講は飛躍的に拡大した。貞享二（1685）年には、幕府は秋葉祭の盛況を禁じ、以来全国に名を知られるようになった。秋葉大権現は、修験から神仏習合となるが、別当に修験の秋葉寺が置かれた。18世紀中ごろから、各地に秋葉講が誕生していた（西海賢二，2001）。

秋葉山は、中世に諏訪から光明山に達する修験回峰の霊地として、熊野修験により開かれた。開基として、養老元（717）年の泰澄、神龜年中（724-729）の行基、大同四（809）年に柘尾・戸隠を経てきた三尺坊、がいわれる。南北朝以降に熊野に白山信仰が融合し、また火防による民衆済度として発達した。天正十八（1590）年に、北条氏の修験者一掃のため小田原に入り、慶長元（1596）年に富士信仰の箱根板橋に秋葉山ができる。鳳来寺山・秋葉山・光明山が連なり、秋葉講は、信濃、東海、北陸などに多く、白山信仰の定着した地域であった（武井正弘，1988）。

木曾御嶽山

木曾御嶽は、宝亀五（774）年に大己貴命と少彦名命を祀り、それぞれ蔵王菩薩、薬師如来の垂迹とされた（菅原壽清，2002）。桓武天皇のときに、黒沢には御岳権現、王滝には御岳山蔵王大権現の名が贈られた（野口喜一，1969）。大峰の峰入りの形式に習っていたが、修験者は中央に去った。室町以降には重潔斎をする木曾谷周辺の人々を中心に独自の信仰が形成され、「御座立て」の行法が行われるようになったらしく、それが御嶽信仰の中核を占める（菅原壽清，2002）。

天明五（1785）年に尾張の覚明が黒沢登山道を、寛政四（1792）年に武蔵の普寛が王滝登山道を開

いた。御嶽講社の講祖、先達を山内に祀る霊神碑は、五万基を下らないという。御嶽教会は、中座、前座（先達）、四天、一般講員から構成される（西海賢二、2001）。覚明は春日井市、普寛は秩父大滝村落合、一心は長野武石村、一山は埼玉与野市から出て、講社を設立して布教につとめた。黒沢口の御岳神社は木曾一帯の御嶽教の総社であった。現在も濃尾からは黒沢口、関東からは王滝口より上下するものが多い（野口喜一、1969）。講祖の出身地は、いずれも中山道に沿っており、木曾御嶽は中山道からは直接望めないが、木曾の山岳の中心に位置していたと考えられる。また、御座がたてられ、病気治療や卜占、死後に靈魂がお山に引き取られるなど、一般の関心を広く集めたと考えられる。

神仏分離後は教派神道を推進し、奈良市に本庁を置く御嶽教のほか、神道大教、神理教、禊教、大成教、修正派、実行教、丸山教、稲荷教、天台宗寺門派・山門派などとなった。戦後、本来の御嶽信仰に復帰をめざして、黒沢御嶽神社を中心にした木曾御嶽本教が、御嶽教から独立した（生駒勘七、1978）。現在、御嶽大神を祭神として祀るのは、計1104団体、教師（行者）8万人、信者89万人である。御嶽大神を合祀するのは521団体、信者56万人とされている（菅原壽清、2002）。

覚明は7回四国遍路をした。比較的自由に修行ができ、納得できる修行内容をめざした（渡辺嘉満、2004）。明治9（1876）年には、黒沢口女人堂・王滝口大江権現より上の女人禁制は、撤廃された。明治20（1887）年ころは、王滝口登山者は2千～3千人、黒沢口では5千～6千人であった（生駒勘七、1988）。これらは木曾御嶽登拝の一般化を、推し進めた。

6. 山岳と神仏の習合

鱒淵寺は推古天皇二（594）年の開山とされ、出雲大社の別当寺で、延暦寺の末寺である。和銅・天平ころ出雲大社国造が松江市南部から大社に転徙した際、持統天皇六（692）年の金銅観音立像も鱒山に移り、さまざまな交渉をもつようになった。北の唐川にある観音の北院、南の薬師の南院、浮浪滝の蔵王窟と奥院、と称するようになった。これらは、三徳山が蔵王堂を中心とし、大山寺が大神山神社を中心にして、南光、西光、寺中の三院の各根本堂に似る（曾根研三、1985）。

V おわりに

本論では、いわゆる山岳信仰といわれる山について、現在の実態を明らかにし、さらに全国各地の山岳信仰の分布にもとづき、とくに地方の山岳信仰にみられる特色を明らかにした。その成果は以下のとおりである。

1. 山岳は古くより一般の信仰の対象とされ、国ごとに優れた山はとくに「御岳」とよばれた。密教や修験が山岳信仰に影響を与え、近世には広く登拝が行われるようになった。
2. 九州では英彦山や六郷満山などでは、多数の寺院が結びついた、惣山の組織が作られた。
3. 熊野を嚆矢として、山を神仏と結びつけた三山組織が生まれ、出羽三山のように地方の山岳にも広まった。
4. 白山は、さまざまな信仰と習合することにより、全国的に広まったが、白山ではむしろ三馬場に分かれ、また広域から登拝することはなかった。
5. 富士山や木曾御嶽山では、とくに近世後期には講による登拝が盛んとなり、あらたな一般の山岳信仰の組織が作られるようになった。
6. 山岳の周辺には、さまざまな信仰が習合するが、明治以降に神社あるいは寺院とされる中で、近年には出雲のように、習合的性格が再び明瞭となるものがみられる。

なお山岳で行われる修行では、風の音や鳥や虫の声に神仏の声を聞き（声聞）、これを神仏の教示と受け止め悟りを体得し（縁覚）、心身に活気が蘇り（菩薩）、床堅めで禅定の域に達する、という。自然と一体化しながら、擬死再生が繰り返し実修され、得られる験力＝活力は、当人のみならず世間のためとされる。これには山岳が信仰の対象とされる上で、大きな意味を含むと考えられるが、その分析は今後の課題としたい。

謝辞

出羽三山や木曾御嶽山をはじめ、北陸、中国、九州地方の諸山では多くの方々にご教示いただいた。記して感謝する次第である。

参考文献

池上広正（1975）：山岳信仰の諸形態。和歌森太郎編著『山岳宗教の成立と展開』名著出版、

- 85-95. (初出：九学会連合, 人類科学, XII, 1960)
- 生駒勘七 (1966): 『御嶽乃歴史』木曾御嶽本教総本庁, 340p.
- 生駒勘七 (1978): 御嶽信仰の成立と御嶽講. 鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』名著出版, 136-166.
- 生駒勘七 (1988): 『御嶽の信仰と登山の歴史』三岳村, 277p.
- 岩崎敏夫 (1977): 民間信仰から見た東北の山々. 月光善弘編著『東北霊山と修験道』名著出版, 569-582.
- 遠藤秀男 (1988): 富士信仰の成立と村山修験. 鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』名著出版, 26-57.
- 大嶽順公 (1977): 六郷山峯入の順路と実習. 中野幡能編著『英彦山と九州の修験道』名著出版, 360-371.
- 大場厚順 (1988): 妙高山信仰の変遷と修験行事. 鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』名著出版, 376-396.
- 風間弘盛 (2006): 出羽地方における山岳信仰の諸問題. 真言宗豊山派総合研究院紀要, 11, 129-133.
- 岸本英夫 (1975): 出羽三山を中心とする宗教的修行について. 戸川安章編著『出羽三山と東北修験の研究』名著出版, 104-123. (初出: 帝国学士院記事, 1 (2), 1942)
- 北原裕全 (2006): 石道山天平寺の年中行事. 北陸宗教文化, 18, 143-163.
- 月光善弘 (1977): 東北霊山と修験道. 月光善弘編著『東北霊山と修験道』名著出版, 2-18.
- 小舘衷三 (1977): 岩木山の山岳信仰. 月光善弘編著『東北霊山と修験道』名著出版, 48-68.
- 斎藤典男 (1985): 武州御嶽の成立—建長八年・正和三年縁起を中心にして—. 宮家 準編『御嶽信仰』雄山閣出版, 261-276. (初出: 斎藤典男『武州御嶽山史の研究』隣人社, 1970)
- 桜井徳太郎 (1976): 民間信仰と山岳宗教. 桜井徳太郎編著『山岳宗教と民間信仰の研究』名著出版, 13-32.
- 佐々木哲哉 (1977): 修験道彦山派の峰中修行. 中野幡能編著『英彦山と九州の修験道』名著出版, 34-64.
- 佐藤虎雄 (1985): 蔵王権現の勧請と崇敬. 宮家 準編『御嶽信仰』雄山閣出版, 231-247. (初出: 天理学報, 39, 1962)
- 塩谷順耳 (1977): 羽後式内社と保呂羽山信仰. 月光善弘編著『東北霊山と修験道』名著出版, 286-307.
- 柴山悦次・野口喜一 (1969): 御岳山・乗鞍岳と周辺地域の自然. 上野福男・高校地理研究会『御岳・乗鞍周辺の地理』二宮書店, 24-48.
- 島根県勤労者山岳連盟 (2000): 『出雲の山々』島根県勤労者山岳連盟, 262p.
- 菅原壽清 (2002): 『木曾御嶽信仰—宗教人類学的研究—』岩田書院, 354p.
- 鈴木昭英 (1988): 富士・御嶽と中部霊山. 鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』名著出版, 2-24.
- 曾根研三 (1985): 出雲鱒淵寺の蔵王信仰. 宮家 準編『御嶽信仰』雄山閣出版, 293-303. (初出: 曾根研三『鱒淵寺文書の研究』鱒淵寺文書刊行会, 1963)
- 高岡 功 (1988): 越後における白山信仰の浸透. 鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』名著出版, 527-543.
- 武井正弘 (1988): 秋葉山の信仰. 鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』名著出版, 202-218.
- 千葉徳爾 (1976): 狩と山の神信仰. 桜井徳太郎編著『山岳宗教と民間信仰の研究』名著出版, 117-143. (初出: 千葉徳爾著『続狩猟伝承研究』1971)
- 戸川安章 (1975): 東北地方における山岳信仰の歴史的概観. 戸川安章編著『出羽三山と東北修験の研究』名著出版, 13-38.
- 時枝 務 (2003): 笈ヶ岳山頂遺跡と出土遺物. 山の考古学研究会『山岳信仰と考古学』同成社, 59-86.
- 時枝 務 (2007): 花戸普寛本堂からみた木曾御嶽登山. 第28回日本山岳修験学会木曾御嶽學術大会夏山見学会資料, 3p.
- 長井政太郎 (1975): 出羽三山とその宗教集落の盛衰. 戸川安章編著『出羽三山と東北修験の研究』名著出版, 157-188. (初出: 東北学院大学, 歴史学・地理学, 3, 1972)
- 中野幡能 (1977a): 英彦山と九州の修験道. 中野幡能編著『英彦山と九州の修験道』名著出版,

2-32.

中野幡能 (1977b) : 求菩提山修験道の起源とその展開. 中野幡能編著『英彦山と九州の修験道』名著出版, 124-154.

中野幡能 (1977c) : 九住山猪鹿狼寺とその信仰. 中野幡能編著『英彦山と九州の修験道』名著出版, 372-389.

長野 覚 (2002) : 九州の山岳信仰—記・紀・万葉・風土記・式内社・経塚による—. 山岳修験, 30, 1-22.

西海賢二 (2001) : 富士・御嶽・秋葉の山岳信仰と変遷. 季刊 河川レビュー, 113, 74-79.

西海賢二・早川典江 (2005) : 東日本の民間信仰—出羽三山の石造物造立をめぐる—第一報. 東京家政学院大学紀要, 45, 13-32.

西海賢二・早川典江 (2007) : 東日本の民間信仰—出羽三山の石造物造立をめぐる—第二報. 東京家政学院大学紀要, 46, 1-16.

西海賢二・早川典江 (2006) : 東日本の民間信仰—出羽三山の石造物造立をめぐる—第三報. 東京家政学院大学紀要, 47, 1-30.

野口喜一 (1969) : 王滝川の谷—三岳と王滝—. 上野福男・高校地理研究会『御岳・乗鞍周辺の地理』二宮書店, 87-105.

藤岡大拙 (2006) : 『出雲國神仏霊場巡り～心の旅～』出雲学研究所, 99p.

藤田祐俊 (2006) : 近世出羽三山の動向について—湯殿山をめぐる問題—. 密教学研究, 38, 1-17.

松村英之 (2003) : 白山と越前禪定道. 山の考古学研究会『山岳信仰と考古学』同成社, 127-140.

宮家 準 (1985) : 御嶽信仰の研究成果と課題. 宮家 準編『御嶽信仰』雄山閣出版, 305-327.

宮家 準 編 (1986) : 『修験道辞典』東京堂出版, 517p.

宮田 登 (1976) : 山岳信仰と講集団. 桜井徳太郎編著『山岳宗教と民間信仰の研究』名著出版, 317-334. (初出: 日本民俗学会報, 21, 1961)

森下恵介 (2003) : 五台山山岳遺跡の現状. 山の考古学研究会『山岳信仰と考古学』同成社, 325-347.

山本義孝 (2006) : 彦山中における宿遺跡の検討.

山岳修験, 37, 51-66.

吉田靖雄 (2001) : 行基菩薩の土と木と水の国造り. 季刊 河川レビュー, 115, 84-88.

由谷裕哉 (2006) : 近世下白山における長吏と社家との関係. 山岳修験, 37, 33-49.

和歌森太郎 (1975) : 山岳信仰の起源と歴史的展開. 和歌森太郎編著『山岳宗教の成立と展開』名著出版, 13-43.

和歌森太郎 (1985) : 修験道の成立と御嶽信仰. 宮家 準編『御嶽信仰』雄山閣出版, 71-92. (初出: 和歌森太郎『修験道史研究』平凡社, 1972)

和歌森太郎 (2007) : 『神と仏の間』講談社, 301p. (底本: 弘文堂, 1975)

渡辺嘉満 (2004) : 『覺明靈神 私の考察』私家版, 20p.